

言語習得、言語起源論、外国語学習

石川県立大学 教養教育センター 井東 廉介

言語習得、言語理解（普遍文法）、外国語学習は、言語教育の基本問題であり、言語教育は人間の或る発達段階における、言語という局面の成長・発達を促す教育的な働きかけである。子供の発達に関するテーマでこの問題を取り挙げたのは、人間の発達と言語習得が不可分の関係にあると考えるからである。

言語教育と発達心理学の接点は教育計画、教育方法、教育理論上、共通する問題が多い。特に言語認識、言語の起源、言語能力の起点、言語習得論、教授法の理論的基盤、コミュニケーション能力の発展、等、枚挙に暇が無いほどである。

発達という表現と言語を結び付けてみると、言語学（文献学）の歴史的テーマの羅列のようになる。言語の発達と民族の歴史、言語神授説（アダムの言葉）と言語の系譜、言語の起源の探究と近代言語学、言語生得説の歴史と現代英語学、等等、を挙げることができる。

言語習得論における言語能力の起源

人間の発達、文化遺産としての言語の習得、言語理論と教育を見ると、現在時点での言語教育・外国語教育の様相が一望できるように思われる。

言語の生物学的基盤の理論の歴史を見ると、人間の自然言語は誕生後の音声聞き分け能力や発声能力の発達、言語認識能力、運用能力の発達から、言語能力の起点を何処に求めるかを探りながら、ホモ・ロクエンスと言われる人間の個体発生と系統発生の循環をも視野に入れた壮大で多様な物語に遭遇する。

人間は生物学的に人間と認められるようになって以来、(ア) 音声言語を持っている。(イ) 音声言語は調音器官の巧妙な調整能力（神経伝達系統

と筋肉運動）の上に成立している。(ウ) 聴覚、（視覚）、と調音器官（とそれらを統合する脳）が健全なら、人間は人間社会の中で必ず言語を習得する。（失語症、脳欠損、人間社会環境の欠損した野生児は、言語習得に科学的に論証可能な欠陥を持つ）。(エ) 健全な人間は必ず自分の属する社会の言語を習得する（母語の習得）(オ) 健全な人間は母語以外の言語を学習によって習得することができる。（→普遍文法の存在）。

言語の生物学的基盤の理論の構築には、これらのことをどのように科学的証拠に基づいて説明するかが問題であり、多くの場合言語の運用能力（文法の創造、理解、運用・発信）のように言われる心理的な問題にされてきた。

Eric H. レネバーグの『言語の生物学的基盤』（1974）は、生物学的潜在能力の発現を踏まえて、言語能力の発現を次のように述べている。(i) 言葉は、いくつかの能力が次第に開花することによって開始される：言語習得は、出生後2年目と3年目の間に生ずる、全般的には明確に限定された一連の出来事によって出現するが、これらの一連の出来事は定められた順序をなして、比較的一定の月齢において現れる；これらの言葉の発達経過を示す出来事と運動発達の経過を示す出来事との間には著しい同期性が認められる。これは、言語習得が成熟現象によって支配されていることを示す証拠である。(ii) 言語の自然発生性：言語は極度に複雑な行動であり、その習得には多くの注意と努力が必要であると考えられるが、言語の習得開始後、通常僅か2年で到達する言語による他者との完全な交流は、幼児が自ら努力することによって達成されるのではない。

現代言語学の中の生得論

近代医学と脳科学が脳の中の言語中枢を突き止めることによって、言語学の生得論が終わるわけではない。言語の何が生得的に学習され、何が誕生後の認知学習の中で習得されていくのか、境界線を引くことが至難なのである。いわゆる言語能力は、何処までが生得的な能力で、何処からが認知科学に基づく経験的学習能力なのか：それは量の問題ではなく、創造力（創造性）の原型の問題なのか。新生児が持っている視覚・聴覚の幅広い認識（しようとする）能力はほんのしばらくの期間（数ヶ月）の後刈り込まれるという。このような人間の不思議な能力の出現の現象を言語理論に取り込めるのが問題である。

チョムスキー言語学・普遍文法の説明の難しさと現在言語教育の雑駁な現実主義

チョムスキーは、20世紀の中ごろ、アメリカ構造言語学の限界の彼方に新しい方向を示すものとして、数学理論的基盤を持った音韻論の研究や、統語構造の研究を携えて現れた。チョムスキーの言語観は構造主義言語学の限界を指摘し、その理論的基盤となっている経験主義哲学を批判しつつ、デカルトの合理主義哲学の言語観 -- 他の動物から人間を区別するものは言語使用であり、それを可能にしているのは人間に生得的な理性が存在するからであるとする -- をよりどころに、より精神主義的な言語理論を展開した。とくに、子供の言語習得能力を生得的なものと仮定し、その習得能力の解明こそが言語理論の究極的な目標であるとしている点は、レネバーク（1974）の言語の生物学的基盤論と共通の基軸を持つものである。また、人間全てに共有される言語理解能力は、理論的には普遍文法が存在を示唆し、彼の主張する変形成文法の視点は言語理論の精密化や言語起源論に関する新視点をも提供したと考えられたことによって、半世紀にわたって文法論や言語思想に影響し続けている。

チョムスキーの生得論の批判

Sampson（2005）は、チョムスキー理論の1957年以降の経過と特徴を詳細に検討しながら、彼の生得論を徹底的に批判している。要約すれば、チョムスキーの理論は、厳密に見えて実際には説得力に欠け、生得論に関する論拠は、非常に薄弱で、事例も乏しく、乳幼児の言語習得に関しては実験・実証的基盤を全く持たずに科学的常識を欠いているというものである。しかし、言語生得論や普遍文法、変形成文法は、もはやチョムスキーの手から離れ、各研究者の独自の理論方向や言語資料の扱いによって行われているのを見ると、新しい世代は新しい方向へと向かうことが予想される。

言語生得論とは何だったのか

言語生得論は、生得論者の古典的な考え方の中で、乳幼児が努力することなく自然に覚えるものと言われたことから、言語習得には努力が要らないのだという短絡思考が出現した。しかし、言語学習には昔も今も少年期から青年期にかかる人間を中心とし、時には幅広い年齢層に渡る多くの人々に多大な努力を要求する。それは意識的学習と無意識的学習との違い、あるいは、幼児であれ、成人であれ、生存競争の中で言語以上に遥かに強く要求されるものがある場合、言語に払う努力がかすんで見えなくなるというような相対的な努力意識の問題などが考えられる。人間の幼児の場合、他の動物に比べてあまりにも未成熟に生れてくるので、あらゆる活動に先立って言語の習得がしやすいのである。その方が発達・行動の効率がよいのである。基本的な母語の習得が終了し、他の活動が多くできるようになると、時には言語学習がおろそかになる場合が生じる。学習順位に関して固定観念を持った大人が心配するほど少年期の人間の言語学習順序は高くない可能性がある。

自然状態に任せて言語学習の優先性をそれぞれの子供の行動の中で決めさせれば、おそらく子供は、優先順位に関係なく、遊びや社会化の過程の中で言語習得よりも他の活動を意識するだろう。

現在の子供の社会環境には作為的な状況が多すぎる。このような作為的な環境では、言語学習も意識的学習が多くなり、必然的に意識的、計画的、成果主義的な言語学習になるだろう。

野生児の言語習得が示唆するもの

近代になって発見された野生児の10例のうち言語習得がうまくできたのはわずか1例であったという。1991年に8歳で発見され、野犬に育てられたと見られるウクライナのオクサーナのような例では、動き方、手足の使い方、吠え方、濡れた体を左右交互に素早く回転させて水切り動作をするのを見ると、言語のみならず、乳児期の身体部位の使い方の多くを支配的な環境から学ぶのではないかと強く思わせる。インプリンティングや、人体の外界への適応能力、臨界期は、内容の指定された言語生得能力以上に強い力を持っているのではないか：生得能力は経験学習の強化と生物の能力という面では同一起源なのではないか：あるいは、言語生得能力等は当初から存在せず、在るのは、人体の諸器官の発育に連動した環境への適応力ではないか。

Sampson (2005) の *Language Instinct, Debate* のチョムスキー批判を見ると、21世紀の言語習得論争は、実験やフィールドの研究観察の裏づけのないチョムスキーの観念論、仮説論証的論理風潮を一度洗いなおし、新世代のチョムスキーの後継者と同時代の経験論者たちとの論争の中からより説得力のある理論展開が期待されているようである。

参考文献：

レネバーグ、エリック．H．1974．*言語の生物学的基盤*．大修館書店．

デレック・ビッカートン．1985．*言語のルーツ*．
笥 寿雄、西光義弘、和井田紀子訳．大修館書店

Chomsky, Noam. 1984. *言葉と認識 --- 文法から見た人間知性*．井上和子、神尾昭雄、西山

佑司訳．大修館書店．

Sampson, Geoffrey. 2005. *THE LANGUAGE INSTINCT' DEBATE*, Continuum.

Pinker, Steven. 1994. *THE LANGUAGE INSTINCT*, Penguin Books.